

鄭和の南海遠征に関する考察

平成30年度 3年 2組(38)
指導 法文学部人文社会学科

山内 涼
高橋 弘臣

研究目標

- ①なぜ鄭和はこのような規模の航海をしたか調べる。
- ②この航海がその後どのような影響を及ぼしたか調べる。

航海の目的

- ①しばらくの間途絶えていた交易の再開（朝貢貿易）
- ②明を中心とした国際体制の確立（いわゆる朝貢体制）
- ③明の強大な国力を誇示すること。

航海に至る経緯

- ①明の初代皇帝洪武帝の時期、明の国力が低下していたため、国力の充実を優先した。海外へ投資する余裕がなかったゆえに中止されていた、諸外国との交流の再開をする必要があったこと。
- ②明国内の発展に伴い、国内で生産される物品のみでは民衆の需要を満たすことができなかった。よって、その需要を満たすだけの物品を得る必要があったこと。



図1 鄭和の航海図

航海で得たもの

- ①需要の高い物品（胡椒など）
→国内の新たな需要に応えることに成功した。
- ②多くの朝貢国（マラッカ、ホルムズなど）
→明を中心とした朝貢体制の確立に大きく貢献した。

航海で与えたもの

- ①明の強大な力に基づく周辺諸国の秩序（マラッカ王国の例など）
- ②明銭、陶磁器など中国からの物品
- ③陶磁器の製作技術

回	年（西暦）	最終目的地
1	1405年	カリカット
2	1407年	カリカット
3	1409年	カリカット
4	1413年	ホルムズ
5	1417年	ホルムズ
6	1421年	スマトラ タイ
7	1430年	ホルムズ

表1 鄭和の航海の経緯
4回目から目的地が西進している。目的が変更されていると考えられる。

航海のその後

- ①巨額の出費を強いた7度の航海は、明の財政を圧迫し、国力低下につながった。
- ②北方のモンゴルからの圧力の高まりにより、明は万里の長城を増築するなどしたため、積極的な対外政策を中止せざるを得なかった。言うまでもなく、南海遠征など企図されるはずもなかった。
- ③朝貢国は、明の衰退を見抜いてか、使節の人数を減らしたり、正式な使節をよこさなくなった。
- ④たくさんの中国人が海を渡り、現在華僑と呼ばれている人々の祖先となった。

考察

大航海時代のおよそ100年前の段階では、ヨーロッパ諸国もアジアに進出しておらず、アジア、アフリカ諸国による貿易圏が存在しており、民間、官界問わず貿易が盛んであった。世界は今日とは全く違う様相を呈していたと考えられる。

また、当時はイスラム商人が力を持っており、その国際的影響力は強かったと思われる。鄭和がイスラム系であり、イスラム諸国を訪れたことから、当時の中国とイスラム世界とのつながりが理解できた。

初期の明帝国には力があった。富もあった。その大事業の一つとして、鄭和の南海遠征は行われた。鄭和の遠征は、ヴァスコ・ダ・ガマやコロンブスと比較すると歴史に与えた影響は小さい。しかし大航海時代以前の海上貿易の歴史や中国史には、大変大きな影響を与えたといえる。

参考文献

寺田隆信 『永楽帝』、人物往来社、1966年
『中国の大航海者 鄭和』、清水新書、1984年
『物語 中国の歴史』、中公新書、1997年

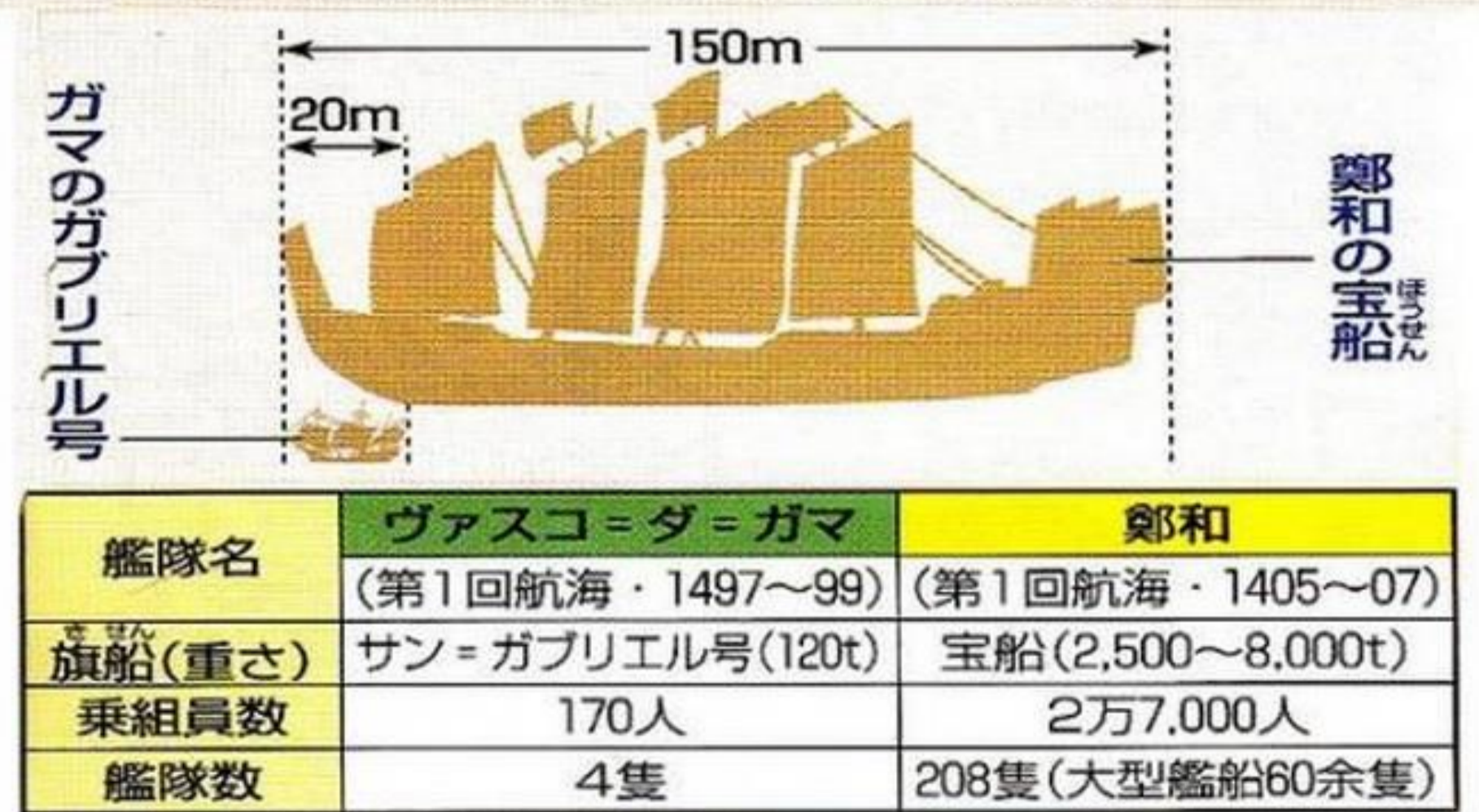
檀上寛 『永楽帝 中華「世界システム」への夢』、講談社、1997年

上田信 『中国の歴史09 海と帝国 明清時代』、講談社、2005年

謝辞

当研究のために書籍と資料を貸与していただき、ポスターの作成中多くの助言をくださった、愛媛大学法文学部人文社会学科 高橋弘臣先生、また当該課 題研究をサポートしていただいた久門先生、本当にありがとうございました。

二つの船団(明とポルトガル)



(『大航海者の世界Ⅱヴァスコ・ダ・ガマ』原書房などによる)

図2 ヴァスコダガマの船との比較スケールの大きさがわかる。

奥の船が鄭和の船団の乗っていた宝船で、手前の船がヴァスコ・ダ・ガマの乗っていたガブリエル号である。
宝船はガマの航海の100年前の船とは思えないほどの大きさを誇る。